様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　5 月　16 日現在

機関番号：14403
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2009～2010
課題番号：21830066
研究課題名（和文）　美術の教育における「抽象表現」の実技指導方法の構築と実践

研究課題名（英文）　Development of practical “abstract art” teaching methods and practice in art education

研究代表者　渡邉　美香（WATANABE　MIKA）
大阪教育大学・教育学部・講師
研究者番号：30549100

研究成果の概要（和文）：
本研究は、現代美術を学校教育に取り入れる指針として「抽象表現」を扱う実技指導方法の構築を目指したものである。制作者の立場から「抽象表現」における基礎技術の段階を捉え、モホリ＝ナジなど現代美術作家の文献研究、小学校での授業分析、大学での授業分析、作品制作の分析から、各段階（初級者、中級者、上級者）における実技指導の内容、方法、評価を検討・提示し、これらの成果を論文で発表した。

研究成果の概要（英文）：
A purpose of this study is to develop practical teaching methods of “abstract art” adopted in school curriculum. In this study I classify learner’s programs into three grades: primary stage, intermediate stage and advanced stage, and show how to teach abstract art in the each stage.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	890,000	267,000	1,157,000
2010 年度	820,000	246,000	1,066,000
総　計	1,710,000	513,000	2,223,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教科教育学
キーワード：美術教育　抽象表現　素材体験　表現実技指導　現代美術

１．研究開始当初の背景
本研究を行うにあたり以下のような背景があった。

（１）　美術教育は、文化の担い手となる人間の能力育成として、人間の美意識や表現にかかわる重要な教育である。学習者の個々の感性を育み、想像力を培う指導、つまり誰もが表現者となる題材を考える上で、現代美術を教科の内容に取り入れることは必須である。しかし、実際、現代美術は理解されにくく、指導者がどのように扱うべきか分からない状況があった。

（２）　特に「抽象表現」は、人のものの見方や感じ方の変遷を写し出す一つの時代精神の現れとして、現代美術の一ジャンルを形成するものであるが、一般的に日本の美術教育のなかでは、単に具体的な形をもたないものとして解釈され、曖昧で表面的な理解がなされてきた。このように、現代美術を形式主義的に分類し理解する視点の存在が、現代美術に対する理解や指導の困難さを生む一つの要因であると考えられた。

（３）　これまでの美術史における形式的な解釈ではなく、制作者の立場に立った指導

方法の提案がなされれば、「抽象表現」が持つ柔軟な「造形思考」や「感性を高める機能」などの教育的可能性を学校教育において生かすことができるのではないか。そのような考えから、作品の外見や技法からの理解ではなく、実際に表現しようとする制作者の発想を辿り、その表現を用いる制作過程を考察することによって、学校の授業に取り入れる指導方法を提示しようと考えた。

（４）　申請者は、それまで美術における「抽象表現」の造形思考に着目し、制作時における技術（形）と心（精神）との関係から、どのように表現を発展させることができるかについて、実技と理論の両面から研究を行ってきた。この成果をもとに、美術教育において誰もが実際に表現方法を体験し、制作者の側に立った「抽象表現」の理解をもとに実践できるプログラムの構築を着想した。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の点である。

（１）　現代美術の内容を学校教育の中に取り入れるための一つの指針として「抽象表現」の実技指導方法を構築すること。

（２）　美術教育において、「抽象表現」を一つの表現方法として理解するべく、制作過程全体を通して表現技術を段階的に捉え、制作者のレベルに応じた指導内容を明らかにすること。

（３）　加えて、現代美術において新たな表現メディアであるコンピュータグラフィックスや動画などを、素材体験として、美術の指導の中に取り入れていく方法を検討すること。

３．研究の方法

本研究では、「抽象表現」の指導方法を理論研究と実践、実技制作を並行して研究を進めた。

（１）　理論研究では、美術教育における「抽象表現」の扱い方に関する理論をまとめるため、以下の調査研究を行った。

① バウハウスの教育実践者であったL.モホリ＝ナジの美術の指導方法を中心に、現代美術家の制作理論に関する資料収集を行い、文献研究を行った。

② 小学校の図画工作科及び中学校美術科の授業で行われた実践記録、あるいは大学の授業記録を収集し、分析を行った。特に、米国フィラデルフィア地区の小学校と美術館との授業実践の記録をもとに、現代美術の扱い方に関する方法を分析した。

（２）　調査研究をもとに、感性の発達と表現技術の発達をすりあわせながら高次の段階へと進んでいくことのできる実技指導方法を提案するため、表現の技術獲得のレベルを以下のように初級、中級、上級とし、各段階で行うべき指導目標と指導内容、評価基準を検討した。

① 平成21年度においては、「抽象表現」の指導方法全体の枠組みを設定し、初級の実技指導方法についてまとめた。
② 平成22年度においては、21年度の成果をもとに、中級、上級の実技指導方法についてまとめた。

（３）　制作研究においては、現代美術において新たなメディアである写真、コンピュータグラフィックスや動画、光等を用いた作品制作を行い、各メディアにおける制作工程を通して以下の項目を検討した。

① メディアの基本的要素
② 要素の組み合わせ
③ 身体との関わり方（能動性・受動性）
④ イメージの発展性
⑤ より繊細な感性に訴えるための条件

実際には「穏やかさ」というような特定の制作テーマにもとづいて作品作りを行い、イメージと心の状態をどのように近づけていくことができるか各項目での可能性の広がりを追求した。各メディアの特質を生かし、表現の多様性・広がりを見出せるようにした。

４．研究成果

（１）研究の主な成果

本研究課題について、平成 21 年度には、現代美術の教育における「抽象表現」の扱い方に関する理論と実技指導方法として、初級者を対象とした実技指導案をまとめ、論文で発表した。また、平成 22 年度は、中級者、上級者を対象とした「抽象表現」の実技指導案をまとめ、論文で発表した。これらの研究成果として、以下のことが挙げられる。

① 多様な表現が展開する「抽象表現」は、写実絵画のように現実に見えているものとの比較で技術レベルが分かるようなものではなく、具体的な表現レベルが分かりにくかった。この点に関して、基

礎と技術レベルを以下（表１）のように段階的に分類したところ、指導内容をより明確化することができた。また、私たちが世の中で目にする作品は中級以上の制作であり、現代社会において、中級に至るまでの初級段階の技術が見えにくい状況であることから、美術教育において、制作者の立場から初級コースの指導内容を検討し、素材体験を重視した指導方法を提案した。

表１「抽象表現」実技指導における３段階のコース

コース	対象者の段階	表現技術の修得目標
初級	造形要素を用いて表現することそのものが分からない段階	材料との関わりの中から、造形要素（色、かたち、質感、空間、動き等）に基づいた造形的な見方を発見でき、それらの体験から造形活動への興味を持つことができる
中級	素材体験を積み重ね、造形要素を用いながらテーマに応じて構成し、自己表現しようとする意志が生じてくる段階	豊富な藝術文化に触れ、興味ある造形方法を選択しながら自分なりのイメージを造形的に（造形要素を使って）表現できる。自分自身のものの見方や感じ方を発見し形作る行為として表現活動を楽しむことができる
上級	素材体験を十分に積み重ね、自分の表現に適した造形方法を選択することができ、新たな表現の追求を行おうとする意志のある段階	造形要素を自由自在に用いて、自分自身のものの見方感じ方を発信できる。制作体験を積み重ねながら、他者にある種の感動や感情の気づきを与えられる独自の表現を追求できる

② 初級での素材体験を重視した指導に加え、中級では学習者が制作のテーマを決める手立てとなる指導方法、上級においては制作に必然性が生じ高度な完成度をもつ作品を目指す指導を提案した。これらの指導方法及び内容を支える理論は、モホリ＝ナジを中心とした欧米の現代美術家の理論によるものと、国内外の小学校での実践記録、大学での記録を分析したものである。これらの理論に基づき、具体的な事例とともに指導内容を組み立てた。

並行して進めた実技制作研究においては、平成 22 年度に、光と映像を用いた作品をギャラリーで展示発表した。

新しいメディアを用いた制作においては、その特性を生かした造形効果を検証した。それらの検証をふまえ、コンピュータグラフィックスを用いた材料体験の一部を、初級の指導方法に組み込んだ。

（２）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

① 本研究課題は、学校教育に「抽象表現」の指導方法を取り入れることを目指すものであるが、その意義は、表現を専門的技巧の問題から解放し、誰もが表現者として自らを高めることのできる学習機会を提供することにある。「抽象表現」の指導方法について、学習者のレベルに合った表現の深め方を指導者が提案できるようになることで、「抽象表現」に対する形式主義的な認識を払拭し、造形的な面白さを発見し、新しいものを生み出す能力の育成といった「抽象表現」の教育的可能性を浮かび上がらせることができる。これは、手や目を駆使して素材の特質を生かし、工夫して物を作るという、日本人が本来持っている創造力を今一度再生することでもある。

② 「抽象表現」による造形表現は、粘土や紙、絵の具などの一般的な材料以外にも、現代社会にあるコンピュータグラフィックスや動画、光、身近なプラスチック製品や自然環境など様々な素材をメディアとして用いることが可能である。「抽象表現」は新たな造形を生みだしたり、表現方法を発見したりする行為を促すものなのである。現代は情報をはじめ多様なものがあふれているが、それらの特徴や要素を見出し、自分自身の表現に作り替える力を身につけることで、心と技術の一体化した表現を行うことができる。美術教育において「抽象表現」の指導を行うことは、社会の影響を強く受ける現代の子どもたちにとって、初級の体験を経ないために創造力がスポイルされてしまう状況を打開する可能性を持っている。また、造形活動を通した発想力や構想力の育成が見込まれる。本研究課題は、現代社会を生きる日本人の心のバランスを支え、豊かな感性を芽生えさせ、心の豊かさを知る人間の育成を促す美術教育の中で、今後の日本の教育文化に貢献できると考える。

（３） 今後の課題

① 本研究課題では、段階的に指導方法案を組み立て現場の小学校の実践をもとに検討してきたが、中学校での実践を検証するまでには至らなかった。今後、小中学校の現場の教師が取り組みやすい指導を目指すべく、現場の教師の協力を得ながら指導方法案を検証し、改善していきたい。実践に関しては、2010 年夏にオーストラリアの小学校で、文化交流のためのものづくりワークショップを行った際、初心者の素材体験をもとに考えた題材が効果的であった経験を得た。このことから、文化の異なる国の子どもたちと日本の子どもたちの交流のきっかけとして、「抽象表現」による題材が考え

られる。今後、実践の場を諸外国にも広げ、国際社会に生きる子どもたちの造形活動の基盤となるような実技指導方法を考えていきたい。

② 初級段階において、素材体験は多様であるにもかかわらず、本研究課題では限られた事例数しか取り上げることができなかった、さらなる事例を取り上げ、指導内容を精査していく余地がある。中級、上級に関しても、事例をさらに積み上げることによって指導方法の多様性に対応できるようになるのではないかと考える。

③ 新しいメディアを用いた表現―特に動画やコンピュータ等の実技指導内容に関しては、今後さらに充実していく必要がある。実際、映像を抜きにして現代社会を語ることはできず、表現媒体として新しいメディアの扱い方を表現の一つとして獲得していく指導方法の構築は必須である。これまで行ってきた実技制作と理論を並行した研究では、指導方法の理論構築の際、制作者の立場からの視点を取り入れやすい。そのため、今後もこの研究方法を取り入れながら、新たなメディアの造形的可能性を探っていくことを課題とする。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 渡邉美香、現代美術の教育における「抽象表現」の扱い方に関する理論と実技指導方法（２）、美術科研究、査読無、第28号、2011、99－108
② 渡邉美香、現代美術の教育における「抽象表現」の扱い方に関する理論と実技指導方法（１）、美術科研究、査読無、第27号、2010、97－108、http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/21542/1/BK_27_097.pdf
③ 渡邉美香、アグネス・マーチンの講演における教育的コンセプトについて、大学美術教育学会誌、査読有、第42号、2010、407－414

〔学会発表〕（計２件）

① 渡邉美香、フィラデルフィア美術館における学校教育プログラム「Art Speaks!」について、第49回大学美術教育学会、2010年9月20日、武蔵野美術大学

〔その他〕
作品展示
① 渡邉美香、「空間と色の広がりの中に」展、2010年12月28日―2011年1月8、文房堂ギャラリー

６．研究組織
(1)研究代表者
渡邉　美香（WATANABE　MIKA）
大阪教育大学・教育学部・講師
研究者番号：30549100

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：